

桑原武夫集

5

1957
|
1959

桑原武夫集

5

1957

）

1959

岩波書店刊行

桑原武夫集 5

第五回配本(全十卷)

一九八〇年八月一八日 発行

定価 四〇〇〇円

著者 桑原武夫

発行者 緑川亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
電話 〇三六五〇二二
振替 東京六〇六三〇四

印刷・三陽社 製本・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 桑原武夫 1980

凡 例

一、この集は、桑原武夫の作品の中から、代表的ないし主要的と思われるものを、著者が自選し、これを年代順に配列し、十巻にまとめたものである。

一、配列は、ジャンルの如何を問わず、すべて発表年代順によつた。ただし、編集の都合上、厳密に順序に従えなかつた場合も稀れにある。

一、初出の場所と年月は各作品の末尾にしるした。

一、挿入写真のうち、桑原撮影のものには*印を付した。

一、テキストは原則として最近のものを用いた。また、今回若干の訂正を加えたものもある。以後これを定本とする。

一、反訳、対談、座談は収めないが、調べのつく限り、全著作目録には記載した。

一、第十巻には、全著作目録、年譜、索引を入れる。

目次

凡例

一九三〇年ニアリング夫妻との一夕	2
ノーマン博士の思い出	13
『大菩薩峠』	16
西堀南極越冬隊長	20
日本的とはなにか	39
芸術の社会的効果	57
郭沫若氏の一面	89
『明治天皇と日露大戦争』	100
国際ペン大会の印象	108

伝統と近代化	113
一九五 『揚州八怪』から	152
河野学派の落第生	165
第一級の文化論	172
美人観を調査する	174
国文学のあり方	191
一九五 チョゴリザ登頂	198
現代日本における古典のあり方	409
科学技術時代と古典の運命	422
フランス・ナシヨナリスムの展開	430
自 跋	567
挿絵目録	589

1957



石井鑄三『大菩薩峠』挿絵

ニアリング夫妻との一夕

アメリカの社会主義者の長老スコット・ニアリング夫妻と会食するために、私たち京都の「平和問題談話会」の有志が、一九五六年十二月二十七日の夕べ、ささやかな料亭に集まった(恒藤恭、松田道雄、前芝確三、岡本清一、名和統一、松井清、島恭彦、桑原武夫)。

五時という約束だったが、電話がかかり、六時すぎになるから悪しからずというあいさつ。朝は西陣を視察、ひるは立命館大学で座談会があったが、そのあと急に思い立って奈良本辰也君の案内で、三条と七条の未解放部落に回られたのであった。待つ間に私たちは今夜の客のことを語り合った。一八八三年生まれというから、七十二だ。私たちにも寒いこの和室ではつらかろうと、ガス・ストーブを求めたが、そんな設備のある家ではなかった。少し大型の火鉢を一つ追加してもらっただけだ。アプトン・シンクレアー、ドライザー、スメドレーなどと一緒に雑誌を出したこともあり、片山潜ともつき合いがあって、猪俣津南雄も師事したというのだからまさに長老である。一九一五年に思想問題で大学の教職を失ってから、農園をつくって自給自足の生活を行っていたが、最近ではアメリカ国内に三回の大旅行をこころみ、その体験にもとづいて『今日のアメリカ』(雪山慶正訳、

岩波書店)を書いた。昭和の初めころまでは、日本にも愛読者が多かったらしいが、この社会主義の学者は私たちの世代にはすでに無縁であつて、この近刊の訳本以外の知識はないのだった。ただ、この本一冊よんでも、右翼統一戦線がガツチリ組まれている今のアメリカで、孤立して、平和を遊説してあるく老夫婦の苦勞は察しられる氣がした。京都駅へ出迎えた人の話によると、この二人の菜食主義者は元氣に三等車から下りてきたという。

奈良本、訳者の雪山、そして通訳にあたられる柴田徳衛の三氏とともに現われた夫妻は、質素ながらキッチンとした身なりで血色がすこぶるよい。連日活動的なスケジュールを果たしてきた疲勞の色など求めるべくもない。長身のスコット氏はスリッパをはいたままさっさと座敷に入り、それを床の間の前にキッチンとぬぎならべて大火鉢のわきに坐つた。柴田氏が一人々々紹介する。私が昨年ソ連と中国を訪問したという、何という好運な人だ、私たちにはそれは決して許されない、といった。声は大きく張りがある。

紹介がおわるのを待ちかねたように、西陣の織子の月収は三千円ときいたが、どうしてそれで我慢しているのか、市バスの女車掌は七千円もらえるのに、なぜそちらへ行かぬのか、と質問を開始した。織子は住みこみで食事がつくこと、それに労働組合の結成を雇主が好まぬこと、バスの方は定員があり採用試験があることなどを説明したが、わかりにくいようだった。あとでアメリカの内事情についてただしたさい、その農業労働者はカリフォルニアなどをのぞき、一般に二、三人

程度の住みこみだから、組合も作れず社会的勢力とならぬ、という説明があったので、それと同じ事情だという、はじめて納得したようだった。

部落問題について質問があり、これは奈良本氏が豊富な知識で満足させたが、自動車の氾濫、百貨店の盛況、多数の飲食店、バーの繁昌など、日本人のこうしたゼイタクが国民経済上どうして可能なのか、という質問には、私たちは十分科学的に答ええたとは思われなかった。こういう日常の現実について、外国人に納得させるような説明ができぬインテリとはなにか。私は恥かしいことだと思った。

話は当然国際問題にうつった。スエズ問題についてニアリング氏はいった。六月にイギリスがスエズを去り、七月にナセルがこれを国有化した。彼はかくすることに よって西欧の石油をおさえ、同時にアラブ諸国の牛耳をとろうと考えたが、アラブ諸国は一致しなかった。それに必要な力がエジプトにはなかったからであり、かくてスエズ地帯は一種の力の真空地帯となった。力関係の今の世界に真空地帯はありえないが、これをうずめうるものが三つあった。英・仏、ソ連、アメリカ。アメリカはすでに三億ドルを投入してギリシャ、トルコを傘下におさめ、世界最強の海軍を地中海に入れ、空軍基地を各地にもうけ、残るはスエズのみとなっていた。朝鮮や仏印のような局地戦争はアメリカにとって有利であったが、全面的な世界戦争はこれを歓迎しない。そこで戦争をさせてスエズを手中に収める方法を考えていたのである。そうしたさい英・仏が行動を起したのである。

追いつめられた両国は、こうした強行手段によって旧体制を再興しようとしたのだが、全く失敗に
 帰し、北アフリカやアラブ地域で完全に力を失ってしまった。スエズは英・仏の手をすりぬけてア
 メリカの下に入ろうとしている。アメリカはナセルを打倒しようとしないうで、むしろ彼を立てつつ、
 経済的に運河をおさえて中東の石油をコントロールしようとしている。『ニューヨーク・タイムズ』
 がいうように、ここに十年間に十五億ドルを投入して、運河を近代化し、その利益を吸上げるべき
 だと考えている。しかし、中東地帯はなお力の安定には達していないので、中東からやがて平和の
 危機が生じる率はいだらうというのである。

ハンガリー問題については、私たちの間にも必らずしも意見の一致があるわけではないことを告
 白しておいて、ニアリング氏の見解を問うた。

『今日のアメリカ』の終章にも書かれているように、米ソ間の農民視察団の交換はすばらしい効
 果をあげた。ソ連の事情はよくはわからぬが、少なくともアメリカでは、ロシア人は悪魔といわん
 ばかりの宣伝が行なわれていたが、彼らもまた自分たちと全く同じ人間だ、ということが現実に納
 得され、その影響は実に大きかった。ハンガリー事件は、ダレス氏らにとつて、そうした平和共存
 の気分を逆行させるための一種の救いの神であったといえる。反ソ反共宣伝は猛烈になった。日本
 でも日劇の前に事件の写真を陳列したりして同じようなことをやっている。必要以上に騒ぎ立てる
 ことはアメリカの寡頭制の思うつぼにはまるだけだろう。この事件の少し前にアメリカの上院議

員がモスクワを訪問して、フルシチョフに会った。そのさい、もしソ連軍がキューバを占領したら、アメリカは必らずソ連と戦うだろう、という、フルシチョフは、それはもつともだ、もし東欧に米軍が入っても同じことだから、といったという。この事件は、そういう対立の世界の状況のなかで起ったことを知らねばならない。アメリカには東欧諸国からの亡命者の団体があるが、ハンガリーのものが最も有力だった。そして近ごろハンガリーに大きな油田が見つかり、そのためアメリカの石油資本が亡命者団体に一そう援助をあたえていた、という噂もある。これは噂にすぎぬが、反革命勢力に西欧側から多くの働きかけがあったことは確かと見てよい。

しかし、ニアリング氏は、そういうことによってソ連を弁護するのではなかった。ユーゴは自力でファシストを倒したが、他の東欧諸国はすべて赤軍の実力によって革命された。とくにハンガリーは最も強力な封建勢力があり、カトリックが百パーセント支配的であったところで、少数の共産党が赤軍の力によって権力を握ったのである。すなわち、そこには最も強力な反革命勢力があったのだが、これをどう評価するかという点でソ連は間違いをおかしていた。八年前にディミトロフ、チトーなどがバルカンの連合(フェデレーション)を作ることを考えたが、スターリンはこれに反対した。もしこれができていけば、今度のようなことはなかったであろう。スターリンは連合を否定し、それぞれの国に赤軍を送ることで抑えようと考えたが、これは反革命に利することとなった。いかなる国のものであろうと、外国軍隊の駐留は必らず反対機運をつよめるものである。今度の事

件そのものよりも、そこに至るまでのソ連の考え方に根本的な誤りがあったことに注意しなければならぬ。ソ連は最初に社会主義革命を行ない、その後順調にいつている大国である。しかし、世界のすべてのことは先輩である自分たちが一ばんよく知っているとする自惚れがあった。頭がふくれ上がる、ということをやアメリカ語でいうが、ソ連にはそれがあつた。アメリカもまた西欧やアジアについて同じ思い上りをしている、といつて大国主義を批判した。

ソ連に誤りがあつたことは確かだろうが、今回の事件で、ソ連が武力干渉したことを、あなたは肯定するか否定するか、という問いには、木造家屋は火事になりやすい。防火を慎重に考えねばならぬのにソ連があやまちを犯していた、ということをお私に力説したのであつて、火事が出たしまへばしかたがない、消さねばならぬだけだ、という答えがなされた。

ニアリング氏は国連、とくに小国の自覚と協力を希望をよせているようだったが、国連加入後の日本の態度が問題になつた。日本は大国に追隨せず、つねに平和を守る方向で行動すべきだという点で、私たちは一致したが、アジア諸国との関係について、私たちの一人が、日本はもはやアジアの指導者ではない、またそういう自惚れはすてねばならぬ、といつたのに対しては、ニアリング氏は直ちに賛成はしなかつた。別の一人が、日本はもとより力をもつて指導すべきではない。しかし、日本の国力は知的にも技術的にもアジア第一だというのは客観的事実なのだから、自信をもつて兄として協力し、指導すべき点は指導してよいので自己卑下すべきではない、といつたのを受けて、

ニアリング氏は、アジア諸国をあまりユートピア的に考えてはならぬことを注意し、日本は軍服の肩章をちぎりすてた。しかし中将はやはり中将なので、下位のものに敬礼されたらどうしますかね、と冗談めいていった。

アメリカからの援助資金はもらいたくない、という点は一致したが、そのさい経済学者の一人は、日本はまだ公債発行能力もあり、それなしでやって行ける見込みがあると説明した。もしロシアが援助資金を出そうといたら、どうするか、とニアリング氏が質問したのに対し、私たちの側の少数が、それは受けてもよい、ソ連の資金はヒモがつかぬし金利も安いから、これを利用して復興をはかるべきだとの意見が出たが、ニアリング氏は、外国軍隊の駐留はいかなる場合でも悪であると同じく、外国の金は何らかの意味で必ず内政干渉的となる。援助資金の必要な国には、国連が資金を集めて送るべきで、一特定国が直接的に他の特定国に出資するというのには反対だと力説した。

最後に、私たちはアメリカにおける社会主義勢力の進展ないしは第三党の可能性についてたずねた。『今日のアメリカ』の著者は、この国の現状はデモクラシーの名の下に、大戦前のドイツ、日本に似た点を多くもっていると考えている。一部有力者の寡頭制的一党独裁といってよく、一方に忠誠審査やタフト・ハートレー法(労組の幹部に共産系の人をおくことを認めず、政治運動を禁止するもの)、国内安全法(非常時には破壊分子を集中キャンプに入れろとするもの)のような手段があり、他方、マス・コミュニケーションから「議論好きな連中」つまり中央より左の人間を完全

にしめ出し、寡頭制の考え方のみを浸透させることによって、異端的な思想を根絶しようとしている。マッカーシーが失脚したことは、アメリカが自由主義的にもどったということを意味せず、むしろ国論の統一が進み、マッカーシーのごときものを、もはや必要としなくなったと考えるべきである。したがって「第三党」などというのはおかしいので、今の二大政党は基本的に同じものだから、求められるべきはむしろ「第二党」といった方が正確だ。

ところでその「第二党」の可能性はきわめて少ない。それを生み出すものは労働者階級と考えるべきだが、アメリカの労組はタフト・ハートレー法にしばられており、またその幹部、ルーサーとかルイスとかいう連中は大会社の重役に匹敵する高給をとっている。彼ら幹部にとっては結局いまの体制が維持される方が有利なのである。だから地方に小さい進歩的な労組ができると、彼らは配下をその組合に送ってこれをつぶす。そういうふうだから、自分が三年間アメリカ各地を回ったが、労組で話すことは一度もできなかった。アメリカは、日本のようにどこの本屋でもマルクス主義の本を売っているような、自由な国ではない。

平和運動についても同じ状況で、「世界平和評議会の一翼」だった「アメリカ平和十字軍」は一九五五年「破壊運動の団体」と認定されてしまい、平和評議会に代表を送らないのは世界の文明国中アメリカのみである。

アメリカにも抵抗分子がないわけではないが、それは今のところごく少数(few people)である。

しかし、歴史は動く。今から百年あるいは五十年前のイギリスを思い出すがよい。彼らは七つの海を支配し、アジアの大半をおさえていたではないか。それが今日はあの有様だ。誰がそれを想像しえたか。アメリカといえども自惚れをつづけていて、いつまでつづくか。

ただし自分は、その変化の仕方をマルクスがいった通りには考えない。一八八三年に死んだマルクスの考え方が今日そのまま行なわれるとする方が無理なのではないか。自分は社会史の歴史学者の資格でいうのだが、発展した資本主義、中産階級、大きな労働組合、この三者がそろったところでは革命は起りにくいということを認める。イギリス、アメリカ、ドイツに革命機運がなく、ロシア、中国その他革命の行なわれた国はすべて、この三者の欠如した国であったことは歴史的事実だ。自分は基本的にマルクス主義を認めるが、その解釈は現代的修正を必要とすると思う。

この最後の提言は大いに討論を必要とする問題と思われるが、あまりに時間がおそくなるので、閉会にすることにした。

ニアリング氏は、『今日のアメリカ』の「訳者あとがき」にもあるように、決して正統的なマルクス主義者ではなからう。しかし、私は彼のうちに「無政府主義が色濃くただよっている」という雪山氏の言葉には賛成しがたい。あのように激しい圧迫の中で、アメリカ各地を遊説して歩くというような社会的行動は、私たちの慣用における無政府主義の語感には含まれていないのである。ある人がどのようなイデオロギーに立っているか、ということとは大切だが、それと同時に、そのイデ

オロギーをその人がどのような強度をもってうけとめているか、どの程度全人格とのかかわり合いにおいて生かしているかも、大切な目のつけどころである。後の観点をぬかしては、人間の個体存在としての価値は計れないだろう。そう考える私にとっては、この七十二歳の平和の伝道者は、やはり及びがたく立派に見えた。彼はアメリカにおける状況の悪さを客観的によく見ている。しかも、そのことよって彼の信念は少しもくずおれることなく、彼の熱弁はつねにオブチミステイックな響きをもっている。彼は遊説旅行中、泊めてもらった家の雑用を引きうけて、ジャガイモを植えた堆肥をつくったりした。少なくとも皿洗いだけは必らずした、と書いているが、彼と会ってみて納得できるふしがあった。彼のうちには私の知人に多いクエーカー教徒を思わせる、真剣さと質朴さ、実行力と禁欲主義があり、社会運動の組織者というより宗教家めいたところが感じられる。彼は荒地に一粒々々の麦をまいて歩き、それがやがて実ることを確信しているようだ。

三時間あまりの討論中、彼はこの和室を寒いと感じたろうか、あの粗末な精進料理をどう思ったのか、そのそばで肉食しながら酒をのみ、タバコをむやみに吹かす私たちの行儀をどう見たのか、そもそも京都の美しさを何と見たのか、私たちにはわからない。そういう話は一切しなかったのだ。ヘレン夫人は、討論中沈黙していたが、隣にすわっていた私の前の小火鉢の炭火がなくなつたのに気づくと、大火鉢からワリバシで炭火をはさんで私の前にいくつも移してくれた。ニアリング氏が今夜の招待の礼を本當にうれしそうにのべたあと、夫人はしんみりした口調でいった。「みなさん